

当、鉄道友の会客車気動車研究会代表の岡田誠一さんが、2013年8月28日にお亡くなりになりました。48歳でした。

1988年頃より当研究会代表として総務全般を担当していました。合わせて客車気動車のみならず、鉄道全般の調査、研究、執筆活動を続けて、多数の著作も発表され今後の更なる活躍が期待されていた矢先に、突然の訃報が入り言葉ありません。当研究会のみならず、鉄道友の会、そして鉄道趣味者への多大なる功績を残していた、その影響はいかばかりのものか見当がつきません。若くしの他界であり、あまりにも早いお別れとなってしまいました。

ここに謹んで哀悼の意を表するとともに、心からご冥福をお祈りいたします。会の今後の体制などは、決まり次第お知らせ致しますので今しばらくお待ち下さい。

なお、以下に追悼文と『日本の食堂車』2013年島秀雄優秀著作賞受賞について合わせて御報告いたします。

さようなら 岡田誠一さん

鉄道友の会客車気動車研究会編集担当 藤田吾郎
(食堂車 2013 年 9 月号掲載内容の抜粋)

岡田誠一さんは 1964 年の生まれで、私より 5 歳ほど上でした。岡田さんは 1980 年=16 歳ごろから、当会の旧名である鉄道友の会東京支部客車気動車部会に参加したと聞いています。そして 1983 年ごろから現車調査記録を会報に投稿しています。1988 年ごろは会員数も減り、数ページの会報の編集と発送、そのほか会計と総務も引き受けていたと思いますが、とにかくなんでもこなしていました。



私が最初に岡田さんにお会いしたのは、1988 年 5 月に例会に初出席したときでした。岡田さんの第一印象は、ずいぶんとよく話し、元気活発な方だと、ということでした。たまたま岡田さんも私も京王線沿線の在住であることから 2 人とも京王帝都電鉄にも興味があり、話が合いました。そうしたことから、例会以外にもたびたび合う機会ができました。そのときは岡田さんは 25 歳で、会のホープとして実質的に取りまとめを初めていた時期ですが、例会出席者は毎回 10 名程度の停滞期であり、執行担当も不足している時期でもありました。さっそく翌 1989 年には、会計と郵送を私に託されて、入会早々に運営の立場に入ることができて嬉しかったことを記憶しています。

そのときは本会は東京支部所属でしたので、大塚で行っていた支部会議に代表が出席する必要がありましたが、私も代理で数回参加したことがあります。そして、その東京支部行事の一環として、1989 年 10 月 15 日に尾久客車区の見学会を実施しました。もちろん段取りはすべて岡田さんであり、私は開催当日の段取りのため少し早めに呼ばれましたが、現場の方とは話は大体まとまっており、あとは目玉であるマニ 24 501 をどの位置に停止させるか、ということだけでした。そこで現場の方と岡田さんと計 4 名で適当な位置まで押して行って、私とその停止位置をカメラ立ち位置から指示するということになり、後ろの「北陸」編成も撮影できるよう注意しながら希望する位置に停めることができました (下写真)。



1990 年 10 月 15 日開催の尾久客車区見学会でのシーン 開催に先立ちマニ 24 501 を撮影しやすい位置まで移動中、一番右側のスーツ姿が岡田さんで JR 職員を手伝っている

1995年頃、御自宅を改築され、立派なコレクションルームが完成しました。可動式書架を備え、収容可能量は数トン規模と聞いています。そして形式図や取扱説明書などの一次資料をはじめ、多くの資料を収集され、これが趣味のネットワーク構築にも大きく貢献しています。

岡田さんの趣味誌経歴は、1990年頃までは、レイルマガジン誌の24系概略まとめ、また、郵便荷物気動車の連載のサポート、レイルファン別冊での保健車・工事車ぐらいでした。ところが1990年代に入ると、鉄道ピクトリアル誌での形式特集執筆に力が入りはじめます。初の1991年7・8月号の「24系客車寝台特集」では車両解説を担当され、1980年代後半に小野田滋さんがまとめられた「20系固定編成客車特集」「スハ43系客車特集」の流れを引き継ぎ、一次資料を活用しながら手堅くまとめられました。またこの時より、本文執筆は岡田さん、モノクロ形式グラフ構成と車歴表作成は私というセットがスタートして、以降、客車と気動車の特集号は、この体制で進めました。そして、レールバス、キハ10系、キハ20系、キハ23・35系、キハ40系、キハ55系、キハ58系、キハ80系、キハ181系、現存する旧型客車、10系客車((故)勝村彰さんが執筆、岡田さんはサポート)、20系寝台客車、50系客車を扱い、近年のグループは大体網羅することができました。(なお、1994年のキハ183・185特集だけは本文執筆も私が担当しました。岡田さんは御自宅を改築途中で動きがとれなかったことが理由です。)

2000年ごろになると、この時点でも情報が不足で特集化が難関する思われた鋼体化客車、スハ32系、オハ35系にも拡大しました。私はこの企画自体、中身が漏れなく揃うのか、大変半信半疑でしたが、各回半年ほどの準備期間を設定することができて、十分な準備ができて仕上げることができました。最近では、14・24系寝台客車、12・14系座席車、50系客車、キハ20系、キハ40系、キハ181・183・185系など、2回目の挑戦もありました。

岡田さんがこの体制とは別の道を拓き始めたのは1990年代終盤のことで、ネコ・パブリッシングとの付き合いも深くなり、レイルマガジンにも小記事を執筆しはじめています。そして初の単行本としてRMライブラリの1・2号を飾った『キハ41000とその一族 上・下』(1999年)を手がけました。続いてキハ07、客車改造気動車、レールバス、暖房車の各グループを手堅くまとめています。その背景には、(故)星晃さんをはじめとする、車両開発技術者とのルートを確立したことが大きく、聞き取りを交えて欠落した史実を得ることに成功したことがあります。そして、この流れで(故)星晃さんのRMライブラリ100・101号『国鉄車両誕生』(2007・2008年)のとりまとめを担当しています。星さんからの賞賛の言葉が本書末尾を飾っていることは御記憶の方も多いと思います。

岡田さんはアレンジする能力にも大変優れており、(故)鈴木靖人さんのコレクション整理を客車気動車メンバーと貨車メンバーに呼びかけて2003年に実現することができました。これは現在本会有志で行っている、写真の電子化保存活動への大きな布石となりました。また、同年には、本会が東京支部から本部直轄に移行しました。これも岡田さんの成果であり、活動方針を主体的に決めることができるようになりました。

ここ数年は執筆活動の加速化がはじまり、単行本としてはJTBキャンブックスの『国鉄鋼製客車I・II』(2008年)、『国鉄準急列車物語』(2012年)、共著としてRMライブラリ『横浜市電』(2009年、澤内一晃さんと共著)、学研パブリッシング『よみがえる中央本線』(2012年、小川峯生さんと共著)などを執

筆しています。横浜市交通局を退職して趣味活動を本職として専念できるようになったための成果です。最近ではもはや私の把握できる範囲を超えていて、少なくとも上記以外にも、電気車研究会、交友社、ネコ・パブリッシング、イカロス出版、交通新聞社、レイルファンなど出版関係での執筆や取りまとめのほか、鉄道博物館やリニア鉄道博物館など施設への協力もしていたと聞いています。

2012年はRMライブラリ150号として、『日本の食堂車』が発刊されることとなりました。これは客車気動車研究会の執筆となっており、一部は本会会報の「食堂車」100号である食堂車特集(1981年)をベースとしていますが、写真や食堂車メニューを大幅に加え、実質的に描き下ろしの内容です。原稿依頼のアレンジはやはり岡田さんであり、執筆分担と写真手配が進行して、あれよあれよという間に完成に至りました。なお、本書末尾には会代表としての岡田さんの名前とともに、私も「食堂車 編集長」と記載があるものの、若干の写真準備と車歴整理を行ったぐらいで、大した貢献はありません。

続いて2012年1月には「食堂車」創刊40周年特別例会があり、『日本の食堂車』と絡めた進行の企画をしました。瀬古龍雄さんにもゲストとして講演してもらうなど、皆様にも楽しんでいただけるアレンジとすることができました。

全国の趣味者との交流も幅広く、どこのどなたとの繋がりにも強く、出版社とのつながりも固く、そして現業とのコネクションもある、という、はかりしれない人付き合いの上手さに驚くだけではなく、段取りの良さ、どんな相談をしても技術的、法規的なことも含めて必ず答えを導いてくれるという、問題解決能力にも長けている方でした。私から見れば、いわばお兄さんみたいな存在の方でしたので、まだまだ互いに先は長く、2040年ぐらいにお互い白髪となったときには、研究会の年輩人どおしとして、救援車など大昔のことをしみじみと語っているのだろう、と、時々冗談半分に話をしていたところです。

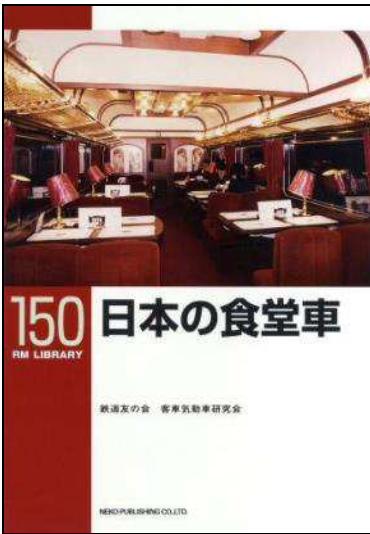
一方、会の運営の議論、特に資料をどこまでオープンにするか、という議論に関しては、ときには意見の合わないこともありましたが、それは幅広い会員の意見を反映するとともに、出版を活用した新たな趣味者の開拓を見渡した、岡田さんなりの意見であったと理解しています。

最近、心臓の具合が悪いと聞き、少々心配していたところですが、残念ながらこの8月28日に48歳で他界されてしまいました。まさか、こんなにも早くお別れが来るとは思っていませんでした。

残された我々としては、これから会の運営をどうするかなど、考えなければいけないことが沢山あります。どうしたらよいかも、よくわからない状況ですが、岡田さんがこれまで築き上げられてきたものをベースとして、少しずつ解決していきたいと考えています。

『日本の食堂車』 2013年島秀雄優秀著作賞受賞

客車気動車研究会



2012年にRMライブラリ No.150として、多くの会員の協力を得て本書が発刊されましたが、このたび、鉄道友の会2013年島秀雄優秀著作賞として受賞されることとなりました。食堂車の発達史にとどまらず、当時のメニューなどのコレクションも紹介され、当時の世相をしのぶ貴重な著作であることが評価されました。詳しくは2013年8月号のRAILFANに掲載されています。授賞式は9月1日に執り行われ、伊藤威信さんに参加いただきました。なお、原稿依頼のアレンジは本研究会の代表であった(故)岡田誠一さんが中心となって行いました。よって賞状と楯はご遺族にお渡しすることとなりました。

